

# 秋葉街道・往昔道中記

むかしの

横松和平太

## 秋葉信仰

秋葉山は今は秋葉山本宮秋葉神社というのが正式の名前だが、元々は養老二(718)年に行基が開いたとされるお寺であり、本尊は聖観音像だ。その後平安・鎌倉時代から火伏せの神として、信州戸隠の修験者と云われる三尺坊を観音菩薩の化身大権現として祀るようになった。三尺坊は白狐に乗って飛来し、烏天狗が火炎を背にして白狐のうえに立つ姿をしていると云う。以来「火災病魔悉除」に靈験ある神仏混淆の寺として知られてきた。

秋葉神が広く祀られるようになり秋葉信仰が盛んになったのは、江戸時代前期の貞享二(1685)年のことと云う。民衆が群集して秋葉祭りと呼び、御幣・幟を携え鉦・太鼓を打ち鳴らしながら村から村へと送り渡す騒ぎが遠州で発生した。これを幕府が社会秩序を乱すものとして禁令を出した。これ以降、秋葉信仰は爆発的な流行となったようだ。

この時代には庶民も自らの家屋を持つようになり、火災から家を守りたいとの意識が広まってきたのがその背景にあると云う。庶民は遠方からも講を組み金を積み立て秋葉山詣にやって来た。資料によれば、明治5年領家村坂下の高木屋を定宿とした講が十五カ国・百もあった。その分布は東は常陸から西は播磨、尾張・武蔵・遠江・駿河・美濃・三河に特に多い。

## 秋葉道

秋葉街道については色々と語られている。そんな中から、宮本常一が著した『山の道』から、抜粋・要約して紹介してみたい。

「秋葉山は、中世以来、火災焼亡、洪水沈没、弓箭刀杖の災厄に靈験があるとして多くの人から信仰され、江戸時代には数百万の信者が三万余の講を組織していたという。秋葉信仰の講はかなり広い範囲に組織されている。その分布は静岡、愛知、山梨、長野の南部、岐阜の美濃側を中心に関東・近畿地方に点々とあり、盛んな頃には中国・東北地方にかけて広い信仰圏を持っていたと思われる。だから、参詣する道者の数も年々おびただしいものにのぼり、その通る道筋も大体決まっていた。それらの道の辻には、「あきはみち」ときざまれた道標がたてられ、道案内の役もはたした。「あきはみち」は何本もあるが、こうした中で代表的なものは次の三本で、秋葉道、あるいは秋葉街道と呼ばれている。すなわち、

①遠州掛川から森、犬居を経て秋葉にいたるもの。

東海道から近いので最も多く利用された。

②三河御油から鳳来寺を経由して熊を通り、天竜川を渡って秋葉にいたるもの。

この二本の道は、鳳来寺と秋葉のふたつの霊場をつなぐ二所詣の道として東海道を往来する旅人たちにさかんに利用されたものである。

③信州飯田から遠山谷を通り、水窪を経て秋葉にいたる道。

この道は遠州側では信州街道とよばれており、古くから信州と遠州をつなぐ大事な道であった。

なおこのほかにも浜松から二俣にでて雲名からのぼる道や大井川中流の川根から山をこえて入る道などもあった。この川根からの道をたどって秋葉、鳳来寺を經由して御油に出ると大井川の渡しや新居の関所、姫街道の気賀の関所などをさけることができるので、後暗いところのある無宿者や浪人などが利用することが多かったといわれている。秋葉・鳳来寺道もそういう点では関所をさける裏街道だったし、飯田からはいる秋葉街道も官道はずれた裏街道になるわけで、秋葉道はいずれも政治の及ばない庶民の自由な道であったといえることができる。」

江戸からお伊勢参りに出かけた人の旅日記を分析したある資料によれば、81%の人が秋葉道を通ったとある。秋葉山、鳳来寺、豊川稲荷を詣でるのは定番だったということだ。

古来こうして秋葉道は歩かれてきた訳だが、その道中を旅日記として書き残した人も多い。時代、季節、道筋、職業、性別、年齢など様々である。ここに、時代を追いながら何人かの旅日記から、そのあらましを紹介してみることにする。

### 司馬江漢の『江漢西遊日記』:表参道⇒鳳来寺道

司馬江漢(1747～1818)は、江戸の浮世絵師にして蘭学者。洋風画の開拓者としても知られ、かの葛飾北斎にも影響を与えた人である。江漢は41歳の年、4月下旬に江戸を出て、洋画修行を目的に長崎まで、往復約1年間の旅をした。その道中記がこれである。

**天明8年(1788)6月**、時代はあの天明の大飢饉がようやく終息したばかりの年だ。掛川から秋葉山詣をし、大野から鳳来寺に詣り、御油で東海道へ戻った。その行程を詳しくみれば、こうだ。(日付はいずれも旧暦、以下同様)

**【6/27】** 掛川～森宿～一の瀬～三倉泊。

「森宿は能所<sup>よきところ</sup>にて富商あり。ばん茶を仕出す処なり」とある。泊りは椀やという家。

森宿は、虚実定かではない人物・幕末の侠客、あの森の石松が出た処である。

**【6/28】** 三倉～瑞雲坂～乾(犬居)村～秋葉山～戸倉～サイ河(西川)<sup>さいかわ</sup>～石打～熊村泊。

天竜川を西川で渡り、そこの茶店で昼食をとったが、店の老婆の話が興味深い。

「ここはまあ、米とては一粒もなし、稗・麦に芋の食にいたします。その上塩が払底、味噌など得がたく、生魚とては見た者一人もござらぬ。昼は猿の番をいたし、夜は猪を追います。ご覧の通り、畑の廻り<sup>めぐ</sup>にかこひをいたします。猿はそのかこひを飛越して、麦や稗をあらします」と。今も昔も獣害は変わらないようだ。熊<sup>くま</sup>で泊まった家は庄屋だったが、「此家障子なし、夜になれども灯火なし。松のふしをともしびとす。寝入りて夜更、猪を追う聞(声)をきく」とある。江戸の人には奇妙に珍しかったようだ。

途中、人足を雇い荷物を持たせたが、「廿二三の女なり。衣装を能くし化粧するならば、美人とも云うべしが、かゝる山家に産れて、かゝるわざをする事哉とて感じけれ。」と記し、荷物を「ひたみにて背負なり」とも書いている。この荷物の運び方は、ヒマラヤ山地で、私はよく見かけた。トレッキングのポーター達がこうだったが、我が国でもかつて存在したということだ。

**【6/29】** 熊～カウレ峠、座頭<sup>ころが</sup>転し、四十四曲坂～三河・遠州堺の峠～巢山～大野泊。

熊村の朝は「四面の山より霧・モヤを起こし、山中の景色なり」とその風情を愛でた。

山路は大難所ばかりで、炎暑の中汗を絞ったとある。途中の地名は現在ではどこにあたるのだろうか。大野で泊まった問屋は医者兼ねていたようだった。

### 三井清野の『道中日記』:表参道⇒鳳来寺道

羽州鶴岡の豪商の内儀・三井清野(1787～?)は、31歳になった**文化14年(1847)3月**下旬伊勢詣りの旅に出た。日光、江戸、秋葉山、伊勢、ついでに京都、大阪、北陸を廻って新潟から鶴岡へと総日程108日、総距離2420kmという大旅行だった。お供や下僕を連れて、江戸藩邸の見学、遊郭見物、関所抜け、買い物三昧と、極めてリッチな物見遊山の旅である。三井家は、元々伊勢の出であり松坂の豪商三井家にあやかっての屋号という。母は羽州清川の名家斎藤家の出、幕末の志士清河八郎は清野の姪の子供にあたるという。家付き娘として聶・四郎兵衛を迎えた一男一女の家庭の主婦。といっても、有閑マダムだろう。

秋葉詣のくだりを詳細にみてみたい。

#### 【5/4】掛川～森町～三倉～一の瀬～麓(坂下) 高木屋泊。

「町はずれより右に鳥居あり。秋葉の一の鳥居。これより入り、だんだん行く。山坂にて大きに悪し。秋葉山麓前迄、川四十九瀬(日記は間違い)という、数え難し。麓、高木屋、旅籠二百文。三倉川沿いの道は、雨が降り続くと増水し、まるで川の中を徒渉しているようになるので四十八瀬川といわれたという。

一の瀬からは登り坂となり、大久保、子奈良安、気田川を渡って犬居。秋葉神社(下社)の麓には旅籠や茶店が並んでいたようだ。

清野さんは高木屋に泊まったが、今は営業していないようだ。我々の宿は門前屋だった。

#### 【5/5】坂下～秋葉山～戸倉～西川～石打～熊～神沢～大平(山本屋泊)

「それよりだんだん行けば、鳥居・茶屋・柱燈 数をかぞえ難し。(中略)女は観音様ばかり奥の院には参られず。ほふしよくの勝手に大きな釜おびただしく、火箸一丈余もあらんか、柱下げ置く。草鞋履きて入り見べし。こふらい道にかかり、下り坂・登り坂たえず、まことに難所なり。…」

女性の参拝は本堂までで、奥の院には入れなかった。観音堂の後ろに五障車があり、それを廻して戻る。チベット仏教にあるマニ車みたいなものであろうか。「ほふしよく」は坊宿あるいは坊食だろうか。「勝手」は台所、一丈余は約3m。山中でありながら、大勢の僧侶・神官・参拝者を収容していたことに清野は驚いている。

「こふらいち道」は「鳳来寺道」だろう。この日、秋葉神社から登り降り六里半歩いた。

#### 【5/6】大平～座頭ころばし～巢山～大野～鳳来寺～門谷～新城(もっこ屋泊)

「それより巢山まで一里半。この所恐い名物あり。それより四十七曲がりなどというて、山坂すさまじく、大野という所の茶屋に参り、...(以下略)」

清野が「恐い名物」と書いているのは、「座頭ころばし」や「勝負峠」と呼ばれていた難所だった。細い崖道が屈曲していて盲人なら足を踏み外して転げ落ちそうな難所ということか。司馬江漢の日記にあった「カウレ峠」と「勝負峠」は同じものかどうか？

清野達は大野から鳳来寺へ行者越えという難所を越えて詣で、新城まで足を延ばした。大野では、荷物を鳳来寺門前の門谷まで別道で運ぶアルバイトを村人に頼んだとある。

## 野田泉光院の『江戸旅日記』:光明山⇒秋葉山⇒鳳来寺道

野田泉光院(1756～1835)は、九州・宮崎の佐土原藩の修験僧・山伏であった。彼は文化9年(1812)9月から文政元年(1818)12月まで、約6年余り全国各地を修行して歩いた。その間に体験、見聞きしたことを旅日記に残した。江戸後期の庶民の暮らしを知れる貴重な記録として価値が高いものとされている。

**文化14年(1817)9月** 61才の時に、秋葉山から鳳来寺へ参詣した。その記録によれば...

【9/1】 遠江一の宮(小国神社・森町一宮)～横川村(浜松市天竜区横川) 泊。

小国神社は森町の山間にある。横川村へは本宮山からの尾根を一山越えたのだろう。

【9/2】 光明山参詣～永沢村(浜松市天竜区春野町長沢) 泊。

横川は光明山の南東麓にあり、春野町領家の南方にある長沢には、光明山から下る。光明山には奥の院が山頂付近に、下がって光明山遺跡(城跡)がある。今では光明山林道と山道の出入りの案内が極めて不明瞭であり迷い易い。でも太平洋が見える山である。

【9/3】 秋葉山参詣～(戸倉)～犀川村(磐田郡龍山町西川) 泊。

山伏だから、神社仏閣はきちんとチェックしている。秋葉山頂の上社は現在は神社だが、江戸時代は修験寺だった。「寺には僧俗合計150人も住んでいて、納経者には大碗わんに盛りきり五合の飯と、やはり大碗盛りきりの汁を出してくれるという豪勢さだった。米を担ぎ上げるための馬が五頭飼ってある。働いている人のための長屋だけでも十何丁(百何十メートル)の長さだった。」とあり、清野さんが、台所の方に関心があったのとはやや違う見方が面白い。

【9/4】 遠州・三河の堺～巢山(愛知県鳳来町巢山) 山元屋泊。

西川から国境を越えた日は、「峠を越え谷に下ることいくつということを知らず」という歩き方をし、五里で巢山に着いたとある。山伏だから、どうということはない。尚「五街道中細見独案内」(安政二年・1855)には、巢山の旅籠として「吉田屋善兵衛」の名前があると資料にあった。因みにこの家は某先輩OB氏の奥様の実家との由。由緒ある旧家の出であったのだ。お見それ致しました。

【9/5】 巢山～鳳来寺参詣～新城～永山村(宝飯郡一宮町上永山) 泊。

## 森本都々子の『夢路日記』:裏参道⇒浜松

信州飯田島田村の庄屋(酒造業)森本真弓・都々子夫妻は**文政5年(1822)3月**、青崩峠越えて秋葉山詣をした。遠州浜松に住む都々子の母親を訪ねての里帰りの旅であったようだ。娘にしきりに会いたがる妻のために父親は、はるばる峠を越えて迎えにきたという。

夫妻には、下働きの男二人が荷物持ちとして同行した。夫は庄屋であり、飯田藩の御仕送り御用達(財政役)も兼ね多忙の身であったようだが、夫婦で旅というのが珍しい。

この時、都々子は33歳で子供はいなかったようだ。

日記の解説文を閲読した訳ではないので、詳細を自ら確認していないのが残念である。柴桂子さんの『近世おんな旅日記』によれば、おおよそ次の通りである。

【初日】 島田村～越久保 泊。 【二日目】 越久保～小川路峠～木沢 泊。

【三日目】木沢～和田～青崩峠～、秋葉詣でして下山後天竜川を舟で下り、大谷村 泊。

翌日、浜松の実家に到着。大谷村は二俣に近いところだ、かなり下っている。

三日目以降の行程が、どうもよく分からない、長すぎるのだ。秋葉山に登る前におそらく途中の何処かで一泊したのではないだろうか？次の資料と比較してみればそうなるはずだ。

### 小田宅子の『<sup>いえ</sup>東路日記』:<sup>あずまし</sup>裏参道⇒鳳来寺道

現在の福岡県中間市、当時は上底井野村の豪商小松屋の家付き娘のお内儀、小田宅子(1789～1870)さんが旅に出た。生まれた年も境遇も三井清野さんとよく似ている。違いといえば、宅子さんが旅に出たのは、**天保12年(1841)53才**の閏正月のことだった。お友達の商家のお内儀三人、荷物持ちの下男が三人一緒の一行七人の大パーティーである。四人のおばさま方は共に和歌を習うサークル仲間。旅の途中で当然一首詠んだりする教養溢れる女性達である。女性がパワフルなのは、今も昔も変わらないのだ。旅の行程は脅威的だ。福岡県から瀬戸内海を経て、大坂・奈良・吉野・伊勢へ。名古屋から妻籠、大平峠を越え、松本から善光寺。高崎・前橋から日光を廻り、江戸見物。鎌倉・藤沢から甲州街道を諏訪へ。峠を越えて高遠、そこから伊奈谷へ出、秋葉道を目指した。壮大な関所回避ルートである。東海道へは御油で戻り、名古屋から関ヶ原、京都を経由して瀬戸内海から帰郷した。何と総日数144日、総距離800里(3200km)と清野さんの上をいく大物見遊山の旅だった。ことし映画『あなたへ』で、6年ぶりに主演した俳優・高倉健(本名・小田剛一)は、この人の子孫にあたるという。そう言えば、この映画は健さんが旅する、ロードムービーだ。

宅子さん達が、秋葉山・鳳来寺へ詣でた**天保12年(1841)4月**辺りの日記を見てみたい。

【4/25】宮田村～片桐(早川町)～湯沢村 泊。

**片桐宿**で秋葉山への道中記を無代で配っている家があったが、「雨いみじくふり出でたれば、馬も駕籠もかさず」「未午(東南)のかたをさしてひたのぼりにのぼるに、道あしく苦しさ、いはんかたなし。」と難儀した。いわゆる**小川路峠越え**の道であり、時は太陽暦でいえば6月上旬、まさに梅雨どき、条件は最悪である。この日宿をとったのは湯沢村。ここでは五木湯という薬湯を沸かして貰ったとあるが、小田宅子さんご一行が宿泊したと、ふれこんでいる宿が現代に残っている。医泉寺温泉「旅館小川乃湯」である。信玄の隠し湯であるらしいが、確かめてみたくなる。

【4/26】湯沢～小川路峠～上村(升屋) 泊。

湯沢村からは富田、久保(越久保)を経て峠に向かう。日記には小川峠とあるらしいが小川路峠、高さ1642mもあり分杭峠(1427m)や地蔵峠(1314m)より高い。峠から下って上村で大鹿村から地蔵峠を越えてくる道と出会う。伊那谷から遠山郷を結ぶ最短路であり、当時は秋葉詣りや善光寺詣りの人々で賑わったという。途中の家が立派なものであるのに、畳を敷かず、「わらむしろのような物のみをしけり」と観察。山田に柴を刈り入れて馬に踏ませている風俗を「いといと珍らし」と書き留めた

【4/27】上村～和田郷～青崩峠～三佐久保(水窪町)泊。

この日も「いみじき坂道なればかるうじてここを越えて」とある。昼飯は乾飯と塩で済ませた。場所は**辰のわたり**とあり**辰之戸**であろう。青崩峠を越えた**西浦**の上流になる。

木地師の集落のあった所という。「山風もあらかな吹きそ青くづれ崩れしみねを打ちこゆる日は」と、一首詠んで峠を越えた。さらに、水窪川の上流を下った。「みな人、いたうつかれにたればものもいわずなり」、「いかにせむ知らぬ山路に行き暮れてあはれやどらん家もなければ」という状態で、闇の夜やっと水窪<sup>みさくぼ</sup>で宿を得た。上村から水窪といえは大変な強行軍である。

【4/28】三佐久保～横根越～きいなまえ～延命坂～平山 泊。

この日は前日の疲れもあったのか、女性だけは駕籠に乗った。〈きいなまえ〉は現在の地図では切開<sup>きいなま</sup>とある。飯田線城西駅の少し南だ。延命坂は何処なのか未詳だが、おそらく明光寺峠の辺りのことではなからうか。この時期山蛭に悩まされたようだが、天竜川を見下ろす眺望絶佳の地で「えもいへずおもしろし」とある。三里行って、早めだが平山で宿をとった。確かに前日に比べれば短い行程だが、翌日の秋葉詣に備えてのことであろう。農家は繁忙期とて、最初は宿を断られたらしいがそれなりに善意ある対応であった。ほととぎすとか、むささびの声とかを聞いたようだ。宿を借りたのは、現在の龍山町日入沢<sup>ひるきわ</sup>ではなからうか。かつては万年屋など旅籠が数件あったという。裏参道の入口千代も近い。

【4/29】平山～裏参道～秋葉山～戸倉～西川～石打～神沢 泊。

夜明け前の暁闇に、谷底から湧きおこる山霧に驚いたりしながら、秋葉山へと登る。ここで詠んだ一首が「立ちのぼる雲か煙か<sup>そまびと</sup> 家有りとだに見えぬ山奥」であった。秋葉神社、秋葉寺に詣り、三尺坊の台所の火釜と大きな火箸をやはり珍しがっている。

【4/30】神沢～大平～青山峠～大野～鳳来寺～新城～豊川 泊(江戸屋)。

神沢から遠江・三河の国境の青山峠まで二里、大野から鳳来寺は一里半という。大野までのルートは、現在の東海自然歩道の道とは違うようだがどうだろう。東海自然歩道は、神沢、大平、青山峠は通らずに、もっと北にある鳶ノ巣山の南麓の県境を越えているようだ。WEBサイトの情報(「東海自然歩道膝栗毛」等)を参照願いたい。

## アーネスト・サトウの『日本旅行記』:小川路峠⇒裏参道⇒秋葉山⇒川根街道

アーネスト・サトウ(1843～1929)はイギリスの外交官。文久2年(1862)公使館の通訳生として19歳で初来日。以来明治33年(1900)まで、帰国した時期もあったが通算25年余り滞日した。駐日英国公使も務め、『一外交官が見た明治維新』という著作でも知られる日本通である。何となく日本の佐藤<sup>さとう</sup>と似た響きの名前であるが、全く関係はないらしい。が、日本人女性 武田兼<sup>かね</sup>を内妻とし、武田栄太郎、久吉という子供を残した。坂本龍馬始め維新の志士達に物心両面に渡り多大な影響を与えたとも言われている。

彼は単なる外交官ではなく、旅行家、登山家としても日本に足跡を残した。登山家としては、御嶽(1878)・立山室堂・針ノ木大雪溪(1878)・妙高山・八ヶ岳(1880)と登っている。秋葉街道を歩いたのは、明治14年(1881)38歳の時だ。この夏には、奈良田から農鳥岳・間の岳にも登頂している。北岳には登っていない。彼の旅行記から詳しく見てみたい。

【7/29】(太陽暦)越久保<sup>こい</sup>～小川路峠～上村～和田(大島屋) 泊。

前日に飯田から天竜川を渡り越久保まできていた。越久保からは小川路峠へのメインルートを辿った。樺(汗馬)沢の小屋、蛭居場の小屋、を経て、峠の小屋で昼食。ここは場合によっては宿泊も可能とある。「上村にはあまり清潔とは思われない宿があり、どこも蚕と蠅でいっぱいだ。人々は一日中蚊帳をつり、日中は蠅を夜は蚊を避けている。」ともある。木沢から登り坂(合戸峠へ)となり、和田の集落を眺め下山し、5時には到着した。

高遠から地蔵峠を越えてきた仲間のホーズ達とは、上村で合流している。上村は二つの街道が合流するところ、秋葉参詣者と物資交流の要衝として賑わっていたという。

和田の大島屋は、先日我々が泊まった民宿の近くに確かあった。今でも続いているということか。

### 【7/30】和田～青崩峠～水窪(諸葛屋) 泊。

この日は、前日木沢で泊まったホーズ氏を待って、11時過ぎに出発。峠から小屋まで下って昼食(当時は小屋があったのか)。南郷(現在の長尾のことか)、小畑という集落を過ぎて3時間、19時本村に至る。その頃の水窪は秋葉街道の要衝として繁栄していたが、昭和12年(1937)の飯田線の開通で寂れた。佐久間ダム建設に伴い飯田線が付け替えられる昭和31年(1956)まで続いた。今ではどうなのか。とても往時のようではないのだろう。

### 【7/31】水窪～西ノ渡～大滝 泊。

水窪から山道は、水窪川からだいぶ上の右岸にそびえる山の中腹を湾曲して進む。絵のような風景だとある。西ノ渡からは、戸倉まで舟を使おうとしたが運賃が高いので断念した。西ノ渡は、天竜川と水窪川との合流点にあたるが、ここからは左岸の山腹まで登る。その後はゆるやかな道が平山まで続く。この日一行は雨から嵐に見舞われ途中の集落で泊まることにしたようだ。戸長が泊めてくれ、鮎をご馳走になったとある。大滝は、山腹に登ってほどなく、行者様先の集落であり、庄屋宅跡とガイド本には記載がある。

### 【8/1】大滝～平山～秋葉山裏参道～秋葉山宿坊 泊。

この日も雨模様で、8時半出発とある。1時間ほど尾根に向かって登り、左側にたどると以前は奥の院があった場所(現在の地図では前不動)に出た。右へ20分程進むと左から気田、久保田を通る川根街道(久保田道)が合流。そして10分程で神社とある。外国人で秋葉山に登ったのは、前年の夏のチェンバレンという海軍兵学校教師に次ぐ二人目であった。

### 【8/2】終日 秋葉山宿坊 泊。

夕方まで絶え間なく雨に降られた為、ドボンとなった。国学者・平田篤胤の本を読んで過ごしたとある。しかも著者のことを面白い男だと評している。難しい日本語をすらすら読めたらしい。現代人はほとんどこの時代の文章を読めないのに、エライものだ。秋葉山宿坊とは三尺坊のことであろう。今でも宿泊できるようだ。

### 【8/3】秋葉山～川根街道～気田～中根川町長尾 泊

一昨日の道を少し戻り、川根街道を久保田から気田に下った。秋葉山の神官から教わった道がいい加減だったのか道に迷ったが、大井川水系まで到達している。

種田山頭火の『風来居日記』:二俣⇒秋葉山下社⇒秋葉山⇒裏参道⇒水窪

昭和14年(1939)4月・5月に秋葉街道を歩いた山頭火の足跡については既に紹介した。よって、ここでは省略させて頂きたい。私の『伊那の井月そして山頭火』を、詳しくは山頭火の『風来居日記』を参照願いたい。補足すれば、彼が泊まった宿だが坂下のN屋とあるのは「なかや」だが、現在は廃業。西渡のI屋は「和泉屋」、現在も開業している。  
りょう  
(了)

参考資料:

- 『山の道』(宮本常一編著/2006年刊)
- 『江漢西遊日記』(司馬江漢、芳賀徹・太田理恵子校注/1986年刊)
- 『きよのさんと歩く 大江戸道中記』(金森敦子/2012年刊)
- 『山伏が見た江戸期庶民の暮らし 泉光院江戸旅日記』(石川英輔/1994年刊)
- 『近世のおんな旅日記』(柴桂子/1997年刊)
- 『姥ざかり花の旅笠—小田宅子の東路日記』(田辺聖子/2001年刊)
- 『日本旅行日記 1』(アーネスト・サトウ、庄田元男 訳/1992年刊)
- 『風来居日記』(山頭火の本 11/1990年刊)
- 『古道案内 信仰の道 秋葉街道』(白馬小谷研究社/2006年刊)
- 「東海自然歩道膝栗毛」<http://www.02.246.ne.jp/~susumu/toukai/index.html>
- 「豊橋市二川本陣資料館講座資料—秋葉道を行く、秋葉道と東海道、信仰の街道秋葉道展」